咽喉頭異常感評価スコアによる スクリーニング処方の効果判定

中村 克彦¹⁾・石谷 保夫²⁾・山下 利幸³⁾
小池 靖夫³⁾

Evaluation of Efficacy of Screening Using “Evaluation Score” for Patients Complaining of Foreign-body Sensation in the Throat

Katsuhiko Nakamura

(Sakaide Kaisei Hospital)

Yasuo Ishitani

(Tokushima City Hospital)

Toshiyuki Yamashita and Yasuo Koike

(The University of Tokushima School of Medicine)

Statistical investigation were carried out on 149 patients with foreign-body sensation in the throat. The patients were given a minor tranquilizer (Medazepam, Mexazolam, Bromazepam) and an anti-inflammatory enzyme for screening and treatment.

The screening was designed to detect high risk patients. We evaluated the efficacy of the screening using evaluation score.

All 11 patients who had a tumor such as hypopharyngeal cancer, nasopharyngeal tumor, thyroid adenoma showed not improvement in score after treatment. This means there was no false negative cases in the screening.

There were 98 patients who had a inflammatory disease or no evidence of disease.

Forty-eight patients (49%) showed improvement in their scores after treatment. The most effective tranquilizer was Bromazepam (70.8%), followed by Mexazolam (43.3%) and Medazepam (40.9%).

Key words: evaluation score, screening, foreign body sensation in the throat

はじめに

われわれは、従来より咽喉頭異常感症の患者に対し、消炎酵素剤とマイナートランキライザ

ーによるスクリーニング処方を用いて、診断的治療を行っている¹⁾。また、異常感の程度を客観的に数値化するための“ものさし”として異

1) 坂出回生病院耳鼻咽喉科

2) 徳島市民病院耳鼻咽喉科

3) 徳島大学医学部耳鼻咽喉科学教室

常感評価スコア表 (表1)²⁾ を作成し使用している。この手法を用いて、スクリーニング前後のスコア値を比較し、薬物の有効性を評価することが可能である。

今回は、腫瘍性疾患を原因とする異常感に対し、スクリーニングがいかなる効果を及ぼしているか、また、非腫瘍性疾患の場合はどうか、マイナートランキライザーの種類によってスクリーニングの結果に差が生じるかどうかについて検討したので報告する。

対象及び方法

対象は、昭和61年1月から62年12月までの2年間に、咽喉頭異常感を主訴として、徳島大学耳鼻咽喉科外来を受診した患者で、咽喉頭異常感症と診断され経過観察を行うことのできた149例である。診断は、「咽喉頭部に異常感を訴えるが、通常の耳鼻咽喉科的視診によっては、訴えに見合う器質的病変を局所に認めないもの」という基準¹⁾に従った。149例のうち男性55例、女性94例で、女性が男性の約2倍を占めており、年齢は、男女共に50才代をピークとし

表1 咽喉頭異常感スコア表

1. ごくたまに、ノドの奥にからんだ感じがする。	2.0
2. ときどき、ノドの奥がムズムズする。	2.9
3. 朝起きたとき、ノドにイガイガする感じがある。	3.2
4. のんだ薬が、ひっかかったときのような感じがある。	3.8
5. いつもノドの奥がかゆい。	4.1
6. ツバをのみ込むときに、ひっかかる感じがする。	4.6
7. ノドのどこかに、何かが貼りついている気がする。	5.1
8. ノドにアメ玉がひっかかっているような気がする。	5.5
9. ノドに骨がささって、その周りが腫れているような気がする。	6.3
10. ノドの奥に大きな塊があるようだ。	6.8
11. ノドを手でしめつけられているような感じがある。	7.1
12. ノドがつまって、食物も水も全く通らないような感じがする。	8.2

表2 咽喉頭異常感症患者の性別、年齢別構成

年齢 \ 性別	性別		計
	男	女	
～19	0	2	2
20～29	3	2	5
30～39	8	18	26
40～49	14	19	33
50～59	20	35	55
60～69	10	14	24
70～	0	4	4
	55	94	149

表3 追求によって見出された諸疾患

慢性副鼻腔炎	46
甲状腺腫瘍	21
慢性咽喉頭炎	18
声帯ポリープ	8
慢性扁桃炎	6
アレルギー性鼻炎	5
頸椎異常	4
下咽頭癌	3
喉頭蓋嚢腫	3
鉄欠乏性貧血	2
糖尿病	2
右鎖骨下動脈走行異常	1
胃ポリープ	1
上咽頭腫瘍	1
不	28
計	149例

て、次に40才代に多い分布となっており、過去における諸家の報告とよく一致している（表2）。

以上の149例に対し、原因疾患追求のための精査を行うことにより見いだされた疾患を表3に示した。慢性副鼻腔炎46例、甲状腺腫瘍21例（慢性甲状腺炎17例、甲状腺腺腫4例）慢性咽喉頭炎18例で、以下、下咽頭癌3例、上咽頭腫瘍1例などの重篤な腫瘍性疾患も含まれている。最下段の不明群は、器質的疾患が見いだされなかったもので、28例であった。

方法は、初診時、咽喉頭異常感症と診断された149例に対し、スクリーニング処方として、消炎酵素剤（ノイチーム顆粒 270mg）とマイナートランキライザーを1日3回、毎食後に内服させた。使用したマイナートランキライザーは、それぞれメダゼパム15mg、メキサゾラム1.5mg、プロマゼパム6mgである。いずれも、

2週間の投与期間とした。また、先に示した異常感評価スコア表（表1）より、患者の異常感に最も近い表現を2つ以内選ばせ、その文のスコアの平均値を患者の異常感評価スコア値とし、薬物投与前後のスコア値を比較することにより、薬物の有効性を評価した。

結 果

鑑別診断上最も問題となる腫瘍性疾患に対するスクリーニング処方の結果を表4に示した。疾患は、下咽頭癌3例、上咽頭腫瘍1例、喉頭蓋嚢腫3例、甲状腺腺腫4例の合計11例である。使用したマイナートランキライザーの種類にかかわらず、スクリーニング後の評価スコアは、甲状腺腺腫の2例で増加した以外、すべて不変であり、スコア値の減少（異常感の軽快）したものは1例も存在しなかった。

次に、非腫瘍性疾患群で使用したマイナートランキライザー別に、スクリーニングの成績を比較した（表5）。この群に含めたのは、慢性副鼻腔炎、慢性咽喉頭炎、慢性扁桃炎の炎症性疾患と、原因不明群の合計98例である。スクリーニングによる治療効果が最もたかかったのは、プロマゼパム使用群で、70.8%であった。他の2剤に比較して5%の危険率をもって有意の治療効果が得られた。

考 察

咽喉頭異常感を訴える多数の患者すべてに対して、原因追求のための徹底的検査を行うことは、実際上不可能である。スクリーニング処方の第一の目的は、咽喉頭異常感のなかに含まれる腫瘍性疾患を類別することにある。したがって、スクリーニング処方が、腫瘍性疾患が原因で起こった異常感までマスクしてしまう程、効果の強いものであってはならない。本研究の対象となった腫瘍性疾患11例に関しては、スクリーニング後のスコア値の減少したものは存在せず、薬物の治療効果が無効であった。これは、スクリーニング処方が腫瘍性疾患を類別する手段として意義をもつと言うことを示している。

表4 腫瘍性疾患に対するスクリーニングの成績

	使用マイナートランキライザー	スクリーニング前後の評価スコアの変化
下咽頭癌 1 2 3	メダゼパム	6.3→6.3 不変
	メダゼパム	5.7→5.7 "
	メキサゾラム	3.4→3.4 "
上咽頭腫瘍	メキサゾラム	4.9→4.9 "
喉頭蓋嚢腫 1 2 3	メキサゾラム	4.6→4.6 "
	プロマゼパム	2.9→2.9 "
	プロマゼパム	3.6→3.6 "
甲状腺腺腫 1 2 3 4	メダゼパム	6.3→6.4 増加
	メキサゾラム	6.7→6.7 不変
	プロマゼパム	4.2→4.6 増加
	プロマゼパム	6.3→6.3 不変

表5 非腫瘍性疾患群に対するスクリーニングの成績

	スクリーニング後の評価スコア			
	減少	不変	増加	減少率
メダゼパム 使用群	18	24	2	40.9%
メキサゾラム使用群	13	15	2	43.3%
プロマゼパム使用群	17	7	0	70.8%
合 計	48	46	4	49.0%

スクリーニング処方のもう一つの目的は、消炎酵素剤の消炎作用とマイナートランキライザーの抗不安作用を利用し、異常感を治療することにある。先に述べたとおり、異常感の原因は極めて多岐にわたり、多くの器質的疾患を含んでいることがわかっている³⁾。しかしその反面、がん恐怖などの不安神経症に通じる心理的な要因が強く働いていることも否定できない。マイナートランキライザーが異常感に奏効するのはその心理的要因に対し抗不安作用が働いた結果と考えられる。非腫瘍性疾患に対して、良い治療効果の得られるマイナートランキライザーを選択することは、スクリーニングの成績を上げることにも結びつく。今回取りあげた3種のマイナートランキライザーで最も治療効果の高かったものはブロマゼパムであり、スクリーニングとして3剤の中で最も有効な薬剤といえる。マイナートランキライザーの抗不安作用を比較すると⁴⁾ブロマゼパムは、強い不安と緊張を有する患者にも有効であるとされており、その薬効の差が今回の成績の差となって表れたものと考えられる。

ま と め

1) 咽喉頭異常感症に対して、3種類のマイナートランキライザー（メダゼパム、メキサゾ

ラム、ブロマゼパム）を使用し、スクリーニングの成績を比較した。

2) スクリーニングの薬物効果の判定に、異常感評価スコアを用いた。

3) 腫瘍性疾患に対する薬物効果は、全例無効であった。

4) 非腫瘍性疾患に対する薬物効果は、ブロマゼパム使用群の有効率が最も高かった。

本論文の要旨は、第4回咽喉頭異常感（症）研究会（1986）において発表した。

参考文献

- 1) 小池靖夫, 他: 咽喉頭異常感症に対する診断的治療. 耳鼻臨床 72: 1499~1506, 1979.
- 2) 藤森敏雄: 咽喉頭異常感をスコア化一問診表で隠れた疾患を拾い出す. 日経メディカル 3: 45~48, 1986.
- 3) 日野原正: 咽喉頭異常感症. 耳鼻臨床 70: 1011~1013, 1977.
- 4) 筒井末春: 各科領域における向精神薬の使い方; その実際, 位置づけ, 問題点—心療内科の立場から—. 心身医 25: 224~231, 1985.

（別刷請求先：中村克彦
〒762 坂出市室町3-5-28
坂出回生病院耳鼻咽喉科）